

## 共感と調和を結ぶ宗教舞踊

—中国チベットにおける人と神霊の存在様相—

何 金蓉 (カ キンヨウ)

キーワード：チベット宗教舞踊、僧侶、信者、共感、調和

### 要旨

本論の目的は、中国四川省北西部のボン教僧院におけるフィールドワークに基づき、中国チベット地域で行われる宗教舞踊の実践・崇拝に焦点を当て、神霊（神々と霊／魂的存在）のリアリティを感じる過程や儀礼空間の存在動態を、そこに身を置く参与者に生起する情動的・知覚的経験から検討することである。また、現代のチベット社会における人々と神霊との関係性を再考することを目指している。

序章では、まず本論の背景や問題意識、目的を提示する。次に、チベット宗教舞踊に関連する先行研究や呪術的・宗教的实践を扱った人類学的研究、特に近年、身体が存在する環境への応答能力に着目した西井と箭内(2020)、村津(2022)、De Antoni(2017)らの研究をレビューする。家木と松本(1984)が提示した宗教舞踊の定義に基づき、既存した研究の中に比較的注目されていない参与者の側面に関しては、チベット宗教舞踊の神学的性格にとどまらず、精神生活の側面に光を当て、本論の視座を示す。

第一章では、チベット社会における人と神霊の関係について、チベットの在来空間構造、悪しき霊／魂との古くからの戦い、強力な神々との間に結ばれる互酬関係という三点から説明する。

第二章では、調査対象であるチベット宗教舞踊の起源とこれまでの発展について考察し、またフィールドであるチョスジャ地域における宗教の展開、現代的な環境の変容、そして僧侶生活の世俗化について概観する。最後に、フィールドワークの詳細、具体的には調査方法、情報データの収集を述べる。

第三章では、調査対象である宗教舞踊が行われるC僧院の歴史や運営組織を説明して、僧院と周辺付属施設、またその立地条件の宇宙観について述べる。

第四章では、C僧院で上演される宗教舞踊「チョウゾチェ金剛法舞」を説明する。まず、長年法会を執り行ってきた経験のある僧侶タンゼンのインタビューに基づき、法会全体の流れに沿いなが

ら、最終日の宗教舞踊「チョウゾチエ金剛法舞」に至る一連の儀礼の過程を紹介し、さらに法会期間中に人々の間で流されている知覚的言説を取り上げる。次に、舞踊上演当日の舞台の配置、火供養の儀式、上演の場面を詳細に描く。

第五章では、宗教舞踊に関するそれぞれの知覚的体験について述べる。まず、舞踊を観に来る信者である村人たちが持つ死後の世界への畏怖感を、『六道輪廻図』における「地獄道」への恐怖を感じ取る知覚的なプロセスを通じて説明する。次に、「燃やされた供物」や「吹きかけられた経文」を例として取り上げ、舞踊公演当日に把握したチベット人が神霊の存在に届く方法、そしてその過程における捕らえた情動的・知覚的な経験を議論する。さらに、舞踊の場に身を置く、観客としての村人と儀式を執り行う役員である僧侶の視点から、舞踊公演当日で捕らえた情動的・知覚的な応酬について論じる。それは主に、信者が儀式的空間に選択的に自らの身を浸していく過程と、僧侶が「五毒から五智への転換」という修行過程で生起する心身変容に焦点を当てて議論する。後者の修行過程に踊り手が直面する可能な状況にできるだけ近づくため、主役である僧侶へのインタビューに基づき、筆者は特定の舞踊内容の模擬上演を実践する。その実践した内容を後に踊り手に確認し、「五毒から五智への転換」過程における心身変容の状況を把握する。

第六章では、「悪しきもの＝魔物への処置」を例に、儀式的行為がチベット宗教の教義と、具体的には霊／魂的存在への「消滅」が「超度」とどのように調和し、または矛盾を孕んでいるのかについて考察する。また、舞踊上演の時空間に見られる宗教生活の世俗化や、儀礼空間における「冒瀆」的な行為を取り上げ、それらは従来の宗教的規範から逸脱するような行為でありながらも、現代的文脈に適応する＝順従することの表れともいえる。同時に、自らの注意の向け方を調整し、他の参与者たちの微細な身体的動きに応え、あるいはそれを期待し、身を置く世界と調和しつつ生きる姿勢も示している。ここに存在するのは、信者と神霊との関係のラインが成り立つ場所、つまり情動・知覚とは無関係なゾーンではなく、この空間に身を浸す／参与するそのたびに、自らの情動的・知覚的応酬が喚起されつつある「中程の流れ」[インゴルド 2018:296]としての儀礼空間である。ここで、人々と神霊との関係を結ぶラインが再び引き締められる。

終章では、本論をまとめ、現代の中国チベット社会における人と神霊のラインを描き出す。